自蹊庵便り

令和七年　長月

NO 176

～茶事折々～　対馬紀行（前編）

この度、八月七日、八日、九日、十日と三泊四日の観光を兼ねた対馬鎮魂茶事、無事盛会裡に終えましたこと、全国から御参加の皆様、対馬の皆様、先ずは紙面をもちまして厚く御礼申し上げます。

気がつけば総勢八十余名、八日、九日、朝茶事と夕ざりの茶事、一日に二席、二日間で八十名をお持て成しさせて頂くという、我が茶事人生集大成の一大イベントにございました。

永年、対馬にはひとかたならぬ思いを温めておりましたので、お咄を頂いたとき二つ返事で承り、迷わず鎮魂茶事をと言葉が浮かび、我が身の齢（よわい）を考えても、幾度も行けることとは思えず、ここは一世一代鎮魂の名に相応しい茶事を！と、鎮魂といえば最も能が相応しく思われ、昨年来より御縁を賜り親しくさせて頂いております、観世流シテ方を代々お勤めでいらっしゃる武田友志（ともゆき）師に、仕舞とお謡の名コンビであられる金森宗和流茶道第十八代家元宇田川宗光宗匠に源氏香を厚かましくお願いいたしました。お二人とも極めて御多忙の中、快くお受けくださり、最高に贅沢な茶事となりました。

お招きいただいた対馬の太田宗寿先生は、裏千家教授、鵬雲齋大宗匠から瑞雲庵という扁額を賜り、ビルの一階とはいえ、良く動線を考えられたご立派な茶室にて、朝・夕一席、二十名ずつという暴挙にも関わらず、滞りなく二日間、八十名様のお席を無事勤め終えることができました。

これは舞台裏の働きの良さも去ることながら、千両役者が勢揃いした幸運にも恵まれ、ああ…またも神様がおりてきてくださった…と心秘かに手を合わせたことにございました。

四畳半を寄付とした汲み出しより始まり、内露地を通っての蹲踞、そして本席へと、床の拝見、釜、棚共に粛々と進み、皆様が着座なされると共に、武田友志師の朗々と謡の声と共に高砂の舞で格調高く幕が開き、炭手前の処を源氏香のふるまいに替え、二十名様への聞香の手際良さ、雅な空気に包まれながらゆったりとした時の流れ、見事なお手並みにございました。

源氏香にはもう一人、香はもとより能・茶・書共々日本文化をこよなく愛され、たしなまれている周さんという中国の方が助手を勤めてくださいました。武田先生もすかさず半東に廻ってくださるというフットワークの良さ、小一時間ほどで見事二十名様への源氏香をこなされ、御飯の火入も終わる二十分程前に武田先生合図のもと、裏方キャリア組も間髪を入れぬ見事さで配膳が行われ、ここでも名脇役の半東達、いず

れも紋付袴で、オンライン講座でお世話になっているN氏、京都教室在籍のO・U氏、O・T氏、皆様袴慣れしたベテラン揃いのところに宇田川宗匠、武田師による酒次の景色添え等々、殿方揃いのお持て成しが一層格調高く波動に満ちた贅沢な初座にございました。あゝ…神様も共に一献楽しんで頂けるよう神膳を用意させて頂くべきであった…かと思わせるほどの終日神おわします宴席にございました。

後座も銅鑼の替わりに武田友志師の謡（融）にて粛々と席入り、先人の對馬人（びと）のための献茶の一服から始まり、濃茶一服のための茶事であるが故に、人数が多くとも亭主が全て点てることを信条としておりますので、この一服の極上を祈り、点てさせていただきました。

千両役者揃いの皆様の胸を借り。私の働きはこの一点に絞り込むことができ、これほど亭主冥利の茶事がありましたでしょうか。続き薄茶、道具拝見も滞りなく終え、締めにもひとさし鶴亀の仕舞、終わりには松風を舞って頂くという贅沢ここに極まれり…と最後には猩々を皆様と共に唱和するという絵に描いたような申し分なき鎮魂茶事のフィナーレにございました。

対馬の神は満足そうに…ファーと消えて行かれました。かくて、対馬鎮魂茶事は私は終日神様と会話していたのみで、宇田川宗匠、武田友志師始め、水屋方、台所方、皆様の働きに感動しきりの不思議な二日間のお席にございました。

お席の御縁を賜りました太田宗寿先生、御社中の皆様、對州窯虎丘の阿比留梅仁先生にも過分なお持て成しを賜りましたこと、對馬人（びと）の皆々様、大変お世話になりました。そして、関東・関西組も含め、御参加くださった六十余名の皆々様、遠方よりの御参席、心より厚く御礼申し上げます。グランドホテルのテラスでは満月と漁り火まで、何とも美しい夜のひとときを賜り、常、天のはからいに頭を垂るる心地にございます。

帰路は線状降水帯の現実に見舞われましたが、武田先生始め、皆様の行動の手際良さで、十日の内にほとんどの方が御自宅に着かれたとか、武田先生は十一日からの夏の一大イベント 能装束の虫干しが予定されておられ心配しておりましたが、流石の手際良さに感動しつつ、東京方面からの皆様のためにも心より御礼申し上げます。各方面から感謝のメールが続々届いております。

その他の皆様それぞれ無事に家路につかれたとの報告を頂きほっとしております。

この度の茶事には下支えの方々の働き大なりにございます。次号に、席中、道具、室礼、献立などの会記と共に、裏の苦労咄、線状降水帯の中、奇跡に近い道のり、九州横断を下路で決断し博多港から大分港までの移動等々、後編をお楽しみに！　合掌

天の神、地の神、水の神がかなり饒舌にさやいておられたような気がします。

神々に感謝！そして御縁の皆々様に多謝！

朝まだき魚を求めて対馬路を辿れば

綿津見の鳥居をくぐる